

# 「セント・ジェイムズ発メンズグルーミング」「クラバブル」な男のために

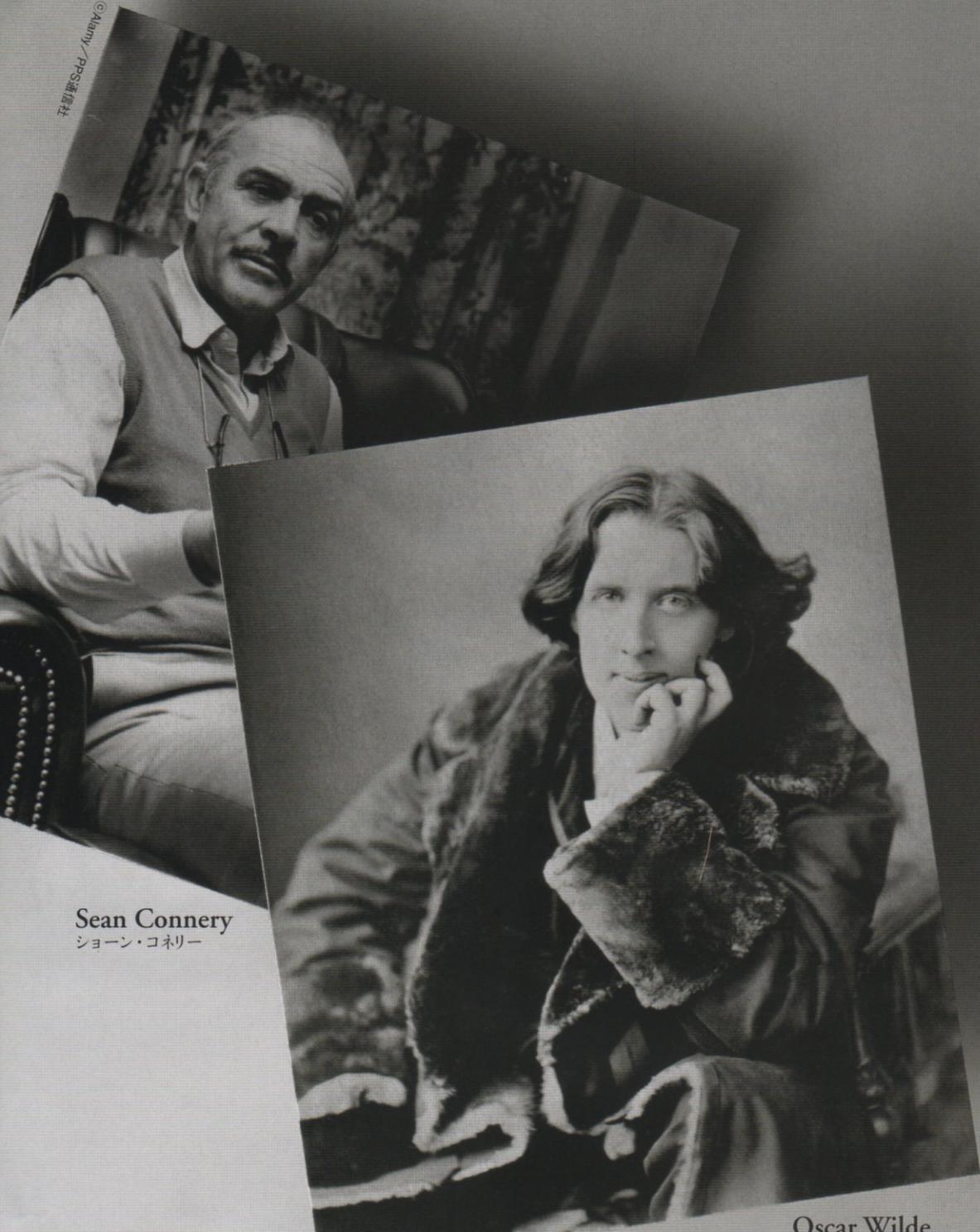
エッセイスト・服飾史家

中野香織

Sean Connery  
ショーン・コネリー

Oscar Wilde  
オスカーウィルド

©CORBIS/amanaimages

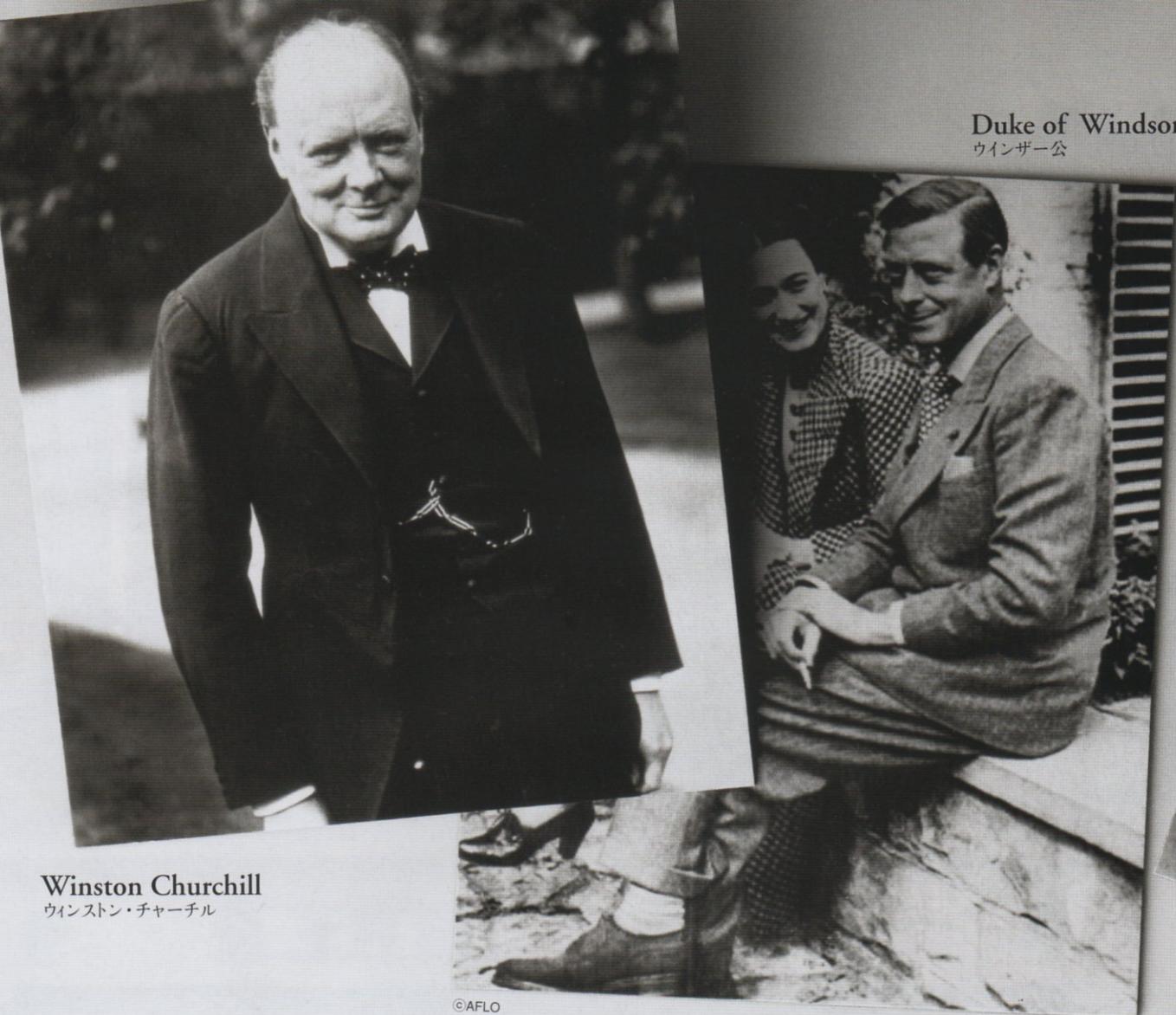


ロンドンのウエストエンド、とりわけセント・ジェイムズ・ストリートからジャーミン・ストリートにかけての界隈には、主要なメンズグルーミングのブランドが結集する。

理髪店兼櫛メーカーとしてスタートした香水商『フローリス』(創業1730年)、フレグランスの『クリード』(1760年)、ブランの製造からスタートした『GBケント』(1777年)、薬局系の『D.R.ハリス』(1790年)、「世界最古の理髪店」こと『トゥルフィット&ヒル』(1805年)、理髪店として開業し、トータルグルーミングのブランドとなつた『ベンハリガン』(1860年)、やはり理髪店発のグルーミング製品を扱う『ジオ F.トランパー』(1872年)……。20世紀以降に創業したブランドも含めると、なんという壯觀。その看板の多くはロイヤル・ワラント(英国王室御用達認可証)を誇り、さながらこの一帯はメンズグルーミングの聖地である。

それにもしても、なぜ、セント・ジエイムズ周辺なのか?

各店の創業年を並べてみると、大きく分けて、二度、創業ラッシュが起きていることに気づく。18世紀後半から19世紀初頭にかけての第一期、そして19世紀後半の第二期。そこには



# Winston Churchill

イギリスを代表する伊達男たち。ドラマティックで破滅的な人生そのものが芸術作品であった、洒脱なオスカー・ワイルド。現代のメンズファッション界に多大な影響を及ぼした、20世紀最高のダンディ ウインザーパーク。男の夢の体現者であり、理想的のダンディ像であるジェームズ・ボンド。彼のイメージがそのままかぶるショーン・コネリー。偉大なリーダーとして、国を超えて愛されたウィンストン・チャーチル。4人ともファッションの上でも自らの搖るぎないスタイルをもった男たちだったが、同時にヘアカット、グルーミングにおいても手を抜かなかったことで知られる。

世紀のイギリスにおいてそれは、従来の「コーヒーハウス」に代わるメンバー一オナリーの社交場であり、政治的な会合が行われることもあればギヤンブルが行われることも多かつた。食事もできるし、宿泊施設もある。うるさい妻から一時のがれる「第二の家庭」としても機能している。入会はたやすくない。

合衆国でジエントルメンズ・クラブといえば、ストリップ・ショウが売り物のクラブをさすが、18、19世紀のイギリスにおいてそれは、従来の「コーヒーハウス」に代わるメンバーオンリーの社交場であり、政

セント ジエイムズ地区は、「クラブランド」とも呼ばれる。会員制のジエントルメンズ クラブが集中する場所なのである。

はなにか事情があるのか？  
あるとすれば、パリでもフイレン  
ツエでもなく、ロンドンの、よりに  
よつてこの界隈が、おそらく世界最  
大のメンズグルーミングの聖地とな  
つたことと、どのような関係がある  
のか？

閉鎖的なクラブのなかでも、とりわけ排他的なことで名高かつたのが、「オールマックス(Almack's)」。ここは男女ともに入会が可能であったが、「社交人士の第七天国」とも「ダンディの神殿」(トマス カーライルが皮肉をこめてこう呼んだ)ともとえられ、入会審査も厳しいことで知られていた。

メンバーになるために必要な資格はといえば、家柄や資産や党派といふわけではなかった。「正しいアドレス（居住地）」、「ブレイン」と「ビューティー」、「エレガンス」あるいは「チャーム」。当時のことばでいえば、「ton」があるかどうか、「粹」とか「流行の先端」と訳されたりするが、つまり、イケてるかどうか、ということ。住む場所でも才智でも容貌でも立ち居振る舞いでも時代の空気と同調する魅力を備えていることが必須とされたのである（アドレスは、現代のイギリスにおいても印象を大きく左右する重要な要素である）。

クラブ会員になるには、会員全員の賛同が得られなくてはならず、「ブラックボール」（反対を表明する黒球）がひとつでもあれば、入会が認められなかつた。

# Duke of Windsor

イギリス伊達男が集う  
ロンドンのグルーミング聖地を巡る

アンティークマホガニーに  
囲まれた個室。ヘアカット  
から頭皮マッサージ、ひげ  
のトリミング、足の魚の目  
や巻き爪治療など、メニュー  
が豊富な、ジオ・F・トランパー。  
スキンケアコスメなどは1階で販売。

CURZON  
STREET W1  
CITY OF WESTMINSTER

9 G.F. TRUMPER 9



ビクトリア女王以降、  
王室御用達の称号を。  
イギリス紳士を生み出す  
稀代の名理髪店

**GEO.F.TRUMPER**  
ジオ・F・トランパー

数々のイギリス小説や映画にも登場する理髪店。特にカーボン街にある店は今も創業当時の、19世紀大英帝国時代の古きよき美しさを保っている。細長い店内の奥はアンティークマホガニーで覆われたバーバー。地下はフェイシャルなどのサロンブースになっている。映画『SWEENEY TODD』の主役ジョニー・デップもここで特訓を受けた。DATA ● 9 C urzon Street London W1J 5HQ ☎ +44(0) 20-7499-1850 楽月～金 9時～17時30分 土曜13時まで 休日 [www.trumpers.com](http://www.trumpers.com)



ジェームズ・ボンドが愛した  
世界最古の最も英国らしい香水商

**FLORIS**

フローリス

「ダンヒル」などの英国メンズファッショングの聖地でもある、ジャーミン街にある『フローリス』。一步足を踏み入れるとシャーロック・ホームズでもなった気分になる。手入れよく磨かれたスペイン産マホガニーの陳列棚に収められた、昔ながらの歯ブラシやウェットボールのシェービングクリームなどは英國美学の結晶。イアン・フレミングのためにつくられた『No.89』は、ジェームズ・ボンドの香りとして世界中に知られる。DATA ●89 Jermyn Street, London SW1Y 6JH ☎+44(0)20-7747-3612 (月～金 9時30分～18時 土曜10時～18時) 休日 [www.florislondon.com](http://www.florislondon.com)

アドレスがイメージの決め手になる文化において、「クラブにふさわしい（clubbable）」容貌をつくるグルーミングと癒しを担う理髪師が、ジエントルメンズ クラブと同じアドレスに店を構えようとしたことは十分、理解できる（薬剤師や香水商についても同様）。また、黒球を避けたい入会希望者が、「正しいアドレス」の店を頼りにするのは当然であるうえ、「第一の家庭」としてクラ



店内には、創業者の故郷であるメノルカ島から取り寄せたハンドメイドの鼈甲のクシ、シェーピングブラシ、歯ブラシなどが並ぶ。世界最古の香水は1760年につくられた爽やかな香りの『ライム』。また、ロシア皇帝オルロフのために創られた『Special 127』や、作家イアン・フレミングが愛した1951年に誕生の『No.89』のファンも後を絶たない。



そんな「オールマックス」がセント・ジェイムズにオープンしたのは1765年、先述の「ブルックストン」が1778年、そして「ホワイツ」が1774年、ミュエル・ジョンソンが「クラブにふさわしくない」という意味の「アンクラバブル（unclubbable）」という形容詞を初めて用いたのが、1764年。老舗グルーミングブランドの、第一次創業ラッシュの時期と、ほぼ重なる。

当時の理髪師（barber）が、ただ「顔をそり、髪を整える」だけの仕事を従事していたわけではないことに注意したい。中世以来、バーバーは、ちょっととした外科手術や傷の手当てもおこなっていた（理髪店のねじりん棒の青と赤と白は、静脈と動脈と包帯の色）。18世紀末までは、医療行為とは切り離されるようになっていたが、客に「癒し」を与える伝統は、そうやすやすとは廢れない。理髪店発のアロマや薬系製品、心に働きかけるフレグランスは、そのような文脈のなかで自然に生まれていった。

アドレスがイメージの決め手になる文化において、「クラブにふさわしい（clubbable）」容貌をつくるグループミングと癒しを担う理髪師が、ジエントルメンズ クラブと同じアドレスに店を構えようとしたことは十分、理解できる（薬剤師や香水商についても同様）。また、黒球を避けたい入会希望者が、「正しいアドレス」の店を頼りにするのは当然であるうえ、「第一の家庭」としてクラ

チャーチルも愛した店内で  
極上のウェットシェービングを味わう

## TRUEFITT & HILL

トゥルフィット&ヒル

宮廷ヘアカッターとして地位を確立した後、ウィッグメーカーを経てバーバーを開店。今も店にある予約帳はまさに歴代の英国紳士録。オーセンティックで超ブリティッシュなシェービング、ヘアカット技術の真価に驚かされる。DATA●71 St. James's Street, London SW1A 1PH 予約受付+44(0)20-7493-2961 営月～金 8時30分～17時30分 土曜17時まで ④日 [www.truefittandhill.co.uk](http://www.truefittandhill.co.uk)



バーバー時代から受け継ぐ伝統を生かしたグルーミンググッズを扱うベンハリган。フレグランスは1902年にマルボロ公のために調香し、子孫であるチャーチルも愛用していた『ブレナムブーケ』が今も英国では人気。



イギリスの領主の館にふさわしい  
エレガントな男の香り

## PENHALIGON'S

ベンハリган

理髪店としてスタート。現在はグルーミンググッズと40種類以上のフレグランスを扱い、香りのパーソナルアドバイスも。セント・ジェームズに近いバーリントンアーケードの店も魅惑的。DATA●41 Wellington Street Covent Garden London WC2E 7BN +44(0)20-7836-2150 営月～水10時～18時 木～土19時まで 日曜11時～17時 無休 [www.penhaligons.co.uk](http://www.penhaligons.co.uk)

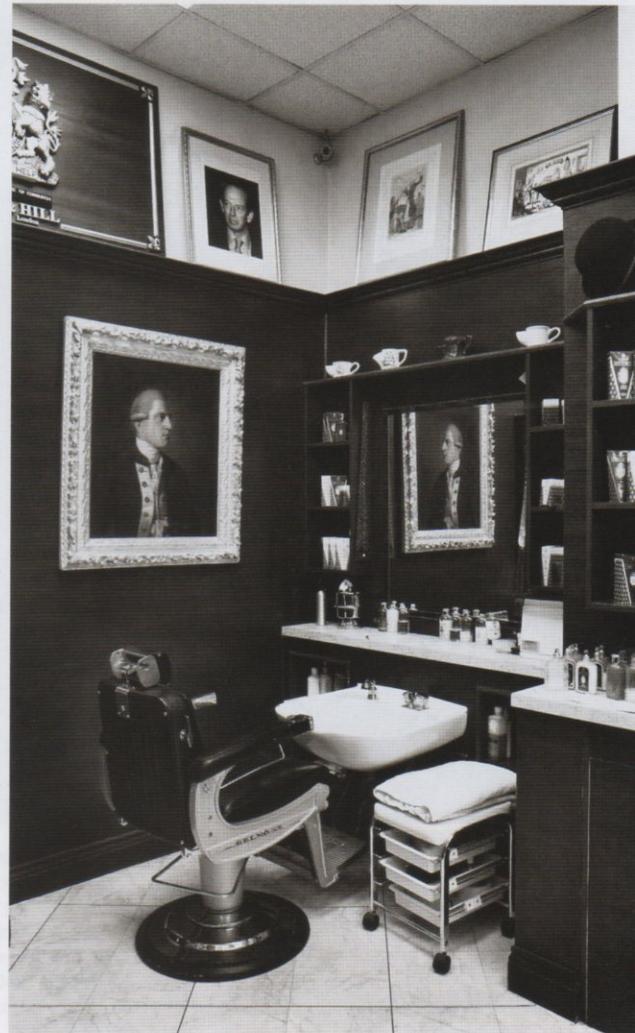
ブリティッシュを利用する多忙な紳士も、仕事前、社交前にひよいと立ち寄れるなじみの店があるにこしたことはない。もちろん、そんな場が公的な情報から私的ゴシップにいたるまでのさまざまな情報が飛び交う場でもあつたことは、想像に難くない。ジョージ・ブライアン・ブランメルは、しばしば『フローリス』の店主と長々と香水談義を交わしたという。「オーラム・マックス」と「ホワイツ」に所属する「趣味の裁定者」ことブランメル様のお気に入りの製品が、「正しいアドレス」と同様、「正しいフレグランス」としてクラブの入会希望者の選考基準に影響を与えたことは、十分に考えられる。閉鎖的なジエントルメンズクラブと高級メンズグループメンズクラブは、手を携えて発展していくのである。

しかも、18世紀末から19世紀の初頭までの時期は、英國ダンディーズ

が、この現象の背景にはなにがあつたのか?

おそらく、1832年、1867年、1885年の選挙法改正の影響が小さくない。産業革命がすすみ、中産階級もそれなりの富を得て、選挙権も獲得し、社会的ステータス——「ジエントルマン」として認められることが、この現象の背景にはなにがあつたのか?

ジエントルマンとして認められることは、すなわちイギリス社会の支配層に組み込まれることでもある。

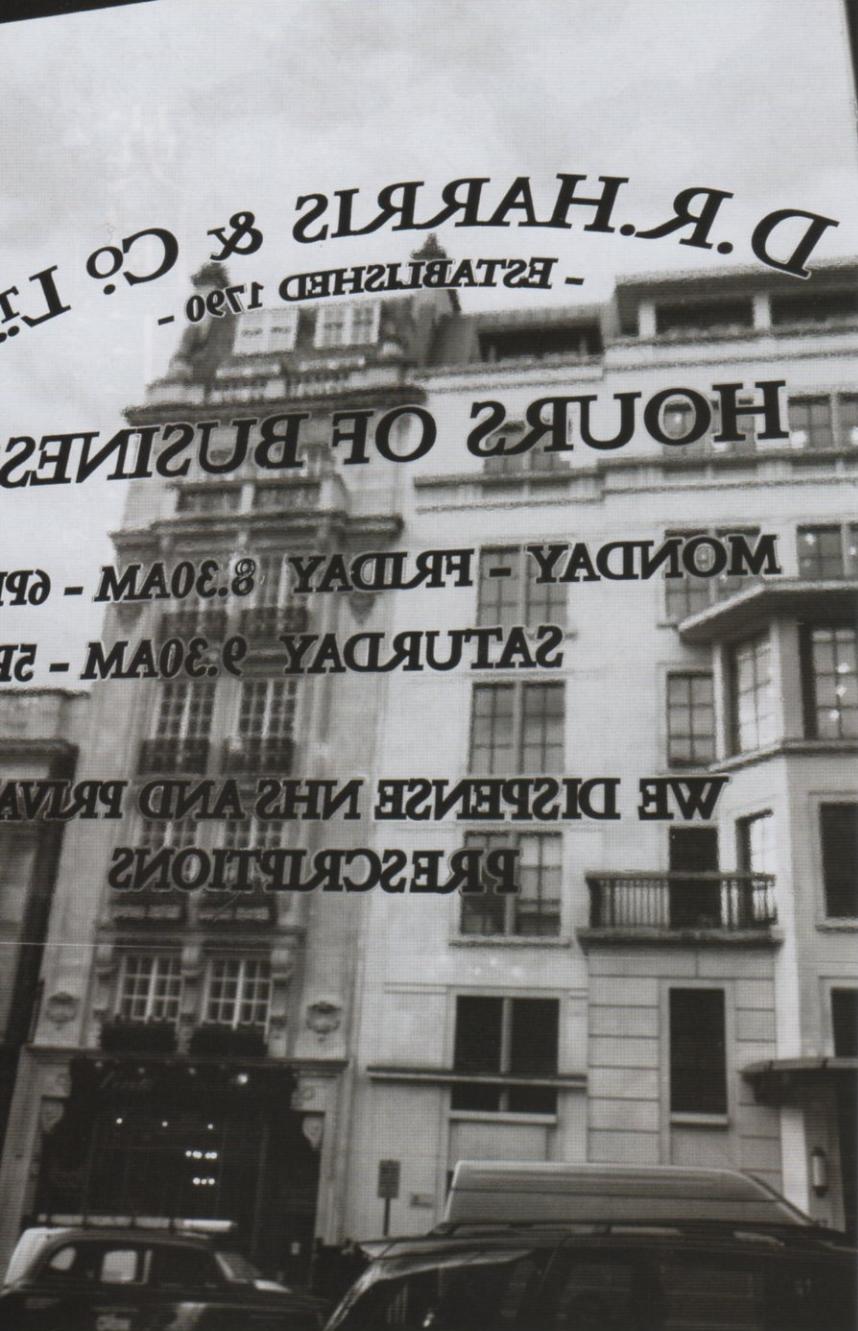


店の奥に4台のバーバーチェアが置かれている。壁には常連客だったイギリス陸軍参謀長であったモントゴメリー子爵の写真と手紙、チャーチルからの手紙が額入りで飾られている。

ムの黎明期でもある。フランスでは革命により王も貴族も失墜し、ヨーロッパのメンズファッションの模範はイギリスの支配層に求められていた。資産や社会的地位ではなく「個」の魅力によって場の支配者となるダンディ（ブランドヘルがまさしくこの時代のヒーロー）は、王なき大陸男子の目には新鮮に映つたであろうし、同時に、王室は滅びることなく存続し、皇太子もふつうにクラブに所属してひいきの店に「ロイヤル・ワラント」を与えたりしていることに、大陸、とりわけパリの元貴族たちは憧れと羨望とノスタルジーを激しくかきたてられたのではと推測する。かくして、「ロイヤル・ワラント」つきのエクスクルーシブなジエントルメンズ理髪店ブランドは、イギリスの国力の発展とともに、ヨーロッパにおける地位も高めていったのではないかと思われる。

さて、次は19世紀後半の第二次グルーミングブランド創業ラッシュだが、この現象の背景にはなにがあつたのか?

おそらく、1832年、1867年、1885年の選挙法改正の影響が小さくない。産業革命がすすみ、中産階級もそれなりの富を得て、選挙権も獲得し、社会的ステータス——「ジエントルマン」として認められることが、この現象の背景にはなにがあつたのか?



時代を超えて変わらぬ  
英國調剤薬局の原形

**D.R.HARRIS**

ディー アール ハリス

昔ながらのハーブ系の香水を製造。香水を得た知識からつくられた清涼感あるスキンケアやヘアケア剤に現在は注目が集まる。由緒正しきセント・ジェイムズ街に位置する店内は、グルーミングや香水店とは一線を画し、まさに薬局の風情。創業時から使い込まれた薬草入れ算箋とアンティークなガラス瓶に入った商品の数々。英國伊達男の心を知るには必ず立ち寄らなければ。DATA●29 St. James's Street London SW1A 1HB ☎ +44(0) 20-7930-3915 営月～金8時30分～18時 土曜9時30分～17時 休日 [www.drharris.co.uk](http://www.drharris.co.uk)

なかのかおり  
1962年生まれ。英國ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。ダンディズム研究の第一人者であり、服飾史家としての著書も多い。近著に『ダンディズムの系譜』(中公新書)、『愛された男たち』(新潮社)、『愛されるモノ』(中央公論新社)、『愛されるモード』(中央公論新社)、『愛されるモード』(中央公論新社)など。2008年より明治大学国際日本学部特任教授。

なかのかおり  
1962年生まれ。英國ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。ダンディズム研究の第一人者であり、服飾史家としての著書も多い。近著に『ダンディズムの系譜』(中公新書)、『愛された男たち』(新潮社)、『愛されるモード』(中央公論新社)、『愛されるモード』(中央公論新社)など。2008年より明治大学国際日本学部特任教授。

親子3代にわたる顧客も多い  
伝説的グルーミング店は、  
セント・ジェイムズ地区に結集している



薬局系トータルグルーミング店であるだけに、品質にこだわった歯ブラシやシェービングブラシも目を引く。またスキンケアコスメもベーシックアイテムだけでなく、肌悩みに合わせたシリーズも展開。

ここがイギリスのおもしろいところなのだが、ジエントルマン制度はハドウエア（土地・財産）とソフトウエア（教養・人柄など）、二本立てで成立する。資産を得て土地を買つても、それにふさわしい人品が追いつかなかつたら、ジエントルマンではないのである。なんと、あいまいでややこしい制度であるとか。

しかし、逆に、あいまいであるからこそ、時代の変わり目にはソフトウエアを読みかえることで新興層を受け入れることにより、ジエントルマン制度のシステムそのものは存続させることができたのだ。この流動的なあいまいさがあつたからこそ、

フランス革命のような流血革命を避けることができたともいえる。  
そこで、ジエントルマンとして認められるソフトウエアを獲得するため、新興層は、古くからのジエントルマンのライフスタイルをなぞろうとする。子弟をパブリックスクールに送り込むのもそのひとつ。そして、自分自身はクラブに所属すること。だが、既存のクラブには受け皿も少ない。というわけで、19世紀後半には、クラブ創設ラツシユが起きるのである。1880年代にはなんと400もの有象無象のクラブができる。「クラバブル」な容貌を獲得したい新興層のニーズの増加

以上のように、ジエントルマンのグルーミングは、きわめて閉鎖的で流動的な、すなわちきわめてイギリス的なジエントルメンズクラブと不可分であり、クラブブランドがグルーミングの聖地となつたのは必然だつた。

そんな歴史をふまえてみれば、セント・ジェイムズ発のグルーミングブランドは、「クラバブル」な男をつくるためのもの、と表現したくなる。現代の、しかも異国において、ジエントルメンズクラブのようないくつかの組織は存在せずとも、同胞が喜んで受け入れたくなる男という意味での「クラバブル」な男の基準ならば考えることができる。たとえば、「ブレイン」「ビューティー」「エレガンス」「チャーム」をもち、自分が自分自身の主である男、というような。おつと、かつこよすぎて嫉妬を買って黒球か。

フランス革命のような流血革命を避けることができたともいえる。  
そこで、ジエントルマンとして認められるソフトウエアを獲得するため、新興層は、古くからのジエントルマンのライフスタイルをなぞろうとする。子弟をパブリックスクールに送り込むのもそのひとつ。そして、自分自身はクラブに所属すること。だが、既存のクラブには受け皿も少ない。というわけで、19世紀後半には、クラブ創設ラツシユが起きるのである。1880年代にはなんと400もの有象無象のクラブができる。「クラバブル」な容貌を獲得したい新興層のニーズの増加

以上のように、ジエントルマンのグルーミングは、きわめて閉鎖的で流動的な、すなわちきわめてイギリス的なジエントルメンズクラブと不可分であり、クラブブランドがグルーミングの聖地となつたのは必然だつた。

そんな歴史をふまえてみれば、セント・ジェイムズ発のグルーミングブランドは、「クラバブル」な男をつくるためのもの、と表現したくなる。現代の、しかも異国において、ジエントルメンズクラブのようないくつかの組織は存在せずとも、同胞が喜んで受け入れたくなる男という意味での「クラバブル」な男の基準ならば考えることができる。たとえば、「ブレイン」「ビューティー」「エレガ